

2019年5月24日（金）

老球の細道483号

育成年代に対する細かな心配り

会津バスケットボール協会 室井 富仁

先月「日本高野連」が「投手の障害予防に関する有識者会議」をスタートさせた。指導者、医師、弁護士など13名の有識者で年4回開催される。きっかけは、投げ過ぎによる投手の野球肘、肩の故障が増加し、昨年12月に新潟県高野連が春の県大会からピッチャーの1日の投球数上限を導入しようとしたことからくる。結果的に実施はされなかったが、全国的に大きな反響を呼んだ。

部員不足の学校やファールなどによる戦術問題などで反対意見も多くあり、高野連としては1年かけて検討していくという。全国軟式野球連盟では今夏から小学生の全国大会を1日上限70球と決定したようである。

また、東京都少年サッカー連盟が今年から7、8月の公式戦を全面的に禁止することを決定した（5月19日朝日新聞）。熱中症対策であるが、一律に公式戦の開催を禁じるのは、サッカー界に限らず異例の取り組みとなる。日本サッカー協会ではかねてから選手の年代を問わず、体調面を考慮して夏の公式戦のあり方が議論されており、今回の都少年連盟の決定は先駆的な事例となったようだ。

都サッカー連盟委員長は「試合をこなすことよりも子どもの命、安全が大切だ」と話し、区や市の大会も7、8がつの開催を避けるよう要請しているという。

育成年代の指導理念の第一は何と言っても「将来性を考慮する」ことだと思う。将来選手としてのみならず、スポーツを通して人間的にも大きく成長するためには、心も体も発展途上であることを考慮し、ケガや生命への安全対策は常に細かな配慮が必要である。

また、ケガの予防を含めて「育成年代指導4つの方針」も重ねて強調したい。

①基礎、基本を重視する：大きな選手になるためには大きな器が必要である。大きな器は基礎、基本によって形作られる。大航海は大型客船で。

②オールラウンドプレイヤーを目指す：身長、体重はどこでどのように変化するかわからない。世界のバスケットボールはオールラウンドプレイヤーがトレンド。

③ケガの予防：身体ができあがらないうちはオーバーユース（使いすぎ）には最新の注意を払う。ケガによって未来の名選手がどれだけコートを去ったことか。

④バーンアウトを防ぐ：バスケットボールは一生できるスポーツである。なのに、育成年代で飽きてしまったり、燃え尽きたり、嫌いになったりしてしまうことは絶対避けたい。コーチの最大の使命は「バスケットボールを好きにさせる」ことである。コーチのせいでバスケットが嫌になる、チームが嫌になることは絶対避けたい。

蛇足になるが、先日福島県バスケットボール協会の理事会が行われた際に、今年度から変更になったU-12（ミニバス）のチーム移籍希望の話が会長から出された。それによると、実際に移籍届を出しているのが県内全体で50件くらいあるそうだ。移籍理由はほとんどが「指導者との関係」が寅ぶったことらしい。

指導者はどんなことがあっても絶対言ってはいけないことがある。映画『フーテンの寅さん』の名セリフ「それを言っちゃおしまいだよ！」。指導者の「それを言っちゃおしまいだよ！」は「俺がこんなに面倒見てやっているのに……」。